

ギャンブル依存症と私

Aさん

最初にギャンブルを経験したのは高校生の頃友人数人とパチンコ屋に行ってスロット台に三人並んで座ったことを覚えている。自分は初めてだったが友人が経験者ということで教えてもらいながら千円、二千円と使って「こんなにあつという間に千円が無くなってしまふのか」とびっくりしながらも三千円目で大当たりを引いて三万円位になった。「こんなことはマグレなのだから、高校生の身分でパチンコ屋に来るのはよそう」とその時は冷静でいたが後日また誘われると「もしかしたらまた勝つかも？」という気持ちが出て芽生えてきて度々パチンコ屋に行くようになった。その頃麻雀も覚えてロクに学校も行かなくなり昼間はパチンコ屋、夜は雀荘という生活をするようになった。学校に行かないでいるから単位も足りず、高校は一年足らずで中退してしまった。この頃の自分はギャンブルで身を立てていく！と真剣に考えていたと思う。実際にはアルバイトの給料では軍資金が全く足りず、しばしば親や祖父母の財布からお金を盗んだりしていた。

例えば、財布に三万円入っていたらそのうちの一万円だけ使ってギャンブルで遊ぼうと思ってパチンコ店に入り今日は絶対一万円までだと決めてもあと一万円入れれば出そう・・・とずるずると使ってしまい気付けば一文無しになることが何百回とあった。

成人してからも一向にギャンブルは止まらず、パチンコ麻雀に次いで競馬にも熱中するようになり負け額も段々大きくなっていった。大負けをすると「もう二度とやらない！」と心に誓ってクレジットカードや消費者金融のカードにハサミを入れたり、馬券を買えなくするためにネットの馬券サービスを解約したりと色々なことをするものの、数日も経てば「今度は勝負レースだけに絞って、賭け額も百円単位で遊べばきっと大丈夫」とすぐに手を出してしまいクレジットカードもすぐに再発行するということを繰り返していた。何か欲しいものがあっても、「大勝ちしないと買えないな」と思うことが当たり前になっていて、友人の結婚式に誘われても御祝儀分として取っておいたお金もすぐにギャンブルで使ってしまい二十代の頃は友人の結婚式にまともに出席できた記憶がない。二十代後半にかけては、競馬から競艇にシフトしていてもっと掛け方が酷くなった。一つのレースに数万円、場合によっては数十万円を賭けるようになっていた。この頃は借金も五百万を超え、毎月利息だけ辛うじて払うような暮らしを延々と繰り返していた。公共料金や自動車税等も何度も滞納し、電気が止められては舟券が買えないということで保安員の方が電気メーターを止めに来るまで払わないということが常態化していた。仕事も自営業になっていたのも、お客さんからお預かりした本来仕入れに使うべきお金をそのまま軍資金に転用することも多く、それを埋めるために借金をするという滅茶苦茶な暮らしが続いた。ギャンブルには平気で何万円も一瞬で使うのに、衣食住や趣味にお金を使うのが惜しくていつもケチな食事をして

いた。舟券で一万円使う事には何の抵抗も無いが、二千円程度の食事も「高い！」と
思っていた。クルマのガソリンも勝ってから入れよう。と考えるので何回もガス欠寸前まで
いった。不思議なもので、ギャンブルをやりたいがために仕事だけはがむしやりに頑
張っていたが、いくら稼いでも稼いでも全て競艇で溶かしてしまうので、そこそ
こ稼いでいるのにいつも銀行口座を含めて全財産が数千円という状態だった。当
然引き落としが出来ず又支払いは遅れる様になるとカード会社や消費者金融から
催促の電話が一日に何十回もかかってきて頭の中では「借金をなんとかしなけ
れば・・・」とそれだけだった。普通、こんなに借金まみれならばギャンブルを
断ち返済に全て回せばいいものを、自分の頭の中には「大穴を取り続けて数千
万当てれば一発で借金返済どころか金持ちになれる」と本気で思っていた。

自分はかなりのおばあちゃん子だったのだが、その大好きな祖母からも何
度も無心を繰り返した。「資格を取るためにテキストを買う」とか「お客さん
のクルマを壊してしまった」等と嘘を重ねて度々数万円の無心をし、大好きな
はずの祖母であってもお金を渋られると内心で「いいから早く貸してくれ！」
と思っていた。そんな祖母が晩年いよいよの時に「バクチばかりやっ
ていないで、しっかりと生きていくんだよ」と言い残して亡くなった。この
時はさすがに大いに悲しみ「ばあちゃんにはギャンブルに金を使っていたこと
を見透かされていたんだな…こんなことではいけない。ギャンブルをき
っぱりとやめてばあちゃんの言った通りちゃんとしよう！」と墓前で心
に誓ったのだが、やはり三日と空けずすぐギャンブルに手を染めていた。
何度ギャンブルを断とうと思っても、どうやってもすぐにギャンブルに
戻ってしまう。自分は頭のおかしい人間なのではないかと自問自答しつつも
ひたすらギャンブルに明け暮れていた。

二十代の頃は、大勝ちすればそれなりに爽快感があって満足感も得られて
楽しく打っていたギャンブルだったがこの頃になると勝っても負けても、楽
しくも何ともなく謎の義務感からひたすら打ち続けるようになっていた。
競艇は朝から晩まで 365 日毎日開催されているので、仕事の合間にやっ
ていたはずがレースを見る合間に仕事を急いで片付ける暮らしになっ
ていた。携帯を片手に運転中も外出中もひたすら舟券を買い続けた。親類
の結婚式に出席するために新幹線に乗って遠方に行く機会があり、車内
で舟券を買っていたが途中で銀行の残高が底をついてしまい、目的地の
手前で途中下車してコンビニの ATM に駆け込みご祝儀のお金を使っ
てしまいそして一文無しになり嘘をついて欠席しとんぼ返りしたこ
ともあった。仕事の荷物を積んだトラックを運転中にも舟券を買っ
ていて、レースの中継に見入ってしまい路肩に乗り上げて高額な積
み荷を高速道路上に撒き散らしてしまったこともあった。一歩間違え
れば死人が出てもおかしくないのにこの時の自分は事故を起こした
ことよりも見ていたレースが外れたことの方が悔しかった。競艇場
やパチンコ屋にいる時にお客さんから電話がかかってくることも、
ギャンブルをしていることがバレてしまうことを恐れて電話に出ず
「電話かけてきやがってレースに集中できないじゃないか」とイライラし

ていた。

そんなある日パチンコ屋のトイレに【この項目にいくつか当てはまるとあなたはギャンブル依存症かも？】というようなポスターが貼ってあって、自分はおそらくギャンブル依存症というものなんだろうけれど、どうにかなるものでもないしきっと死ぬまで借金をし続けて、ギャンブルをしていくんだろう・・・とどこか他人事のように思っていた。あまりにも生活も精神面も苦しくなり、三十代のある時期にインターネットでギャンブル依存症について調べていくと依存症で苦しむ当事者同士が作る自助グループというものがあるということを知ったが、「そんなものに頼らずともやめてやる！」と最初の頃は拒んでいたもののどうにもどんな痛い目に遭ってもやめられず「胡散臭いけれど、このどん底の暮らしがどうにかなるなら・・・」という気持ちで自助グループに出席してみることに。

どんな胡散臭い連中がいるのかとかなり警戒しつつ最寄りの会場に行ってみると、予想外にアットホームな人たちが迎えてくれて、今までどんなことをしてきたか？借金の事や人間関係の事など・・・友人知人には到底話せないような【ギャンブル依存症者にしか理解できない話】をたくさん話してくれた。最初は怪しい壺でも売り付けられるのかと思っていたが、警戒している自分に対し「こんなところに来たからといってやめられると思えないでしょう。明日以降ギャンブルをやってしまったら、どうか来週また来てみてください。」と勧められたのを覚えている。事実、自助グループに行き話をするだけで、俺がこんなにも苦しんでいるギャンブルがやめられるワケが無いと決めつけていたけれど、そこまで言うならば・・・と次回行くまでひとまずギャンブルをやらないうちでみようと軽い気持ちで数日間が過ぎた。不思議なことにその一週間ギャンブルをしないで過ごすことが出来た。十数年間、インフルエンザになってもケガをしても三日と空けず続けてきたギャンブルが初めて一週間止まったことに驚きを隠せなかった。これはもしかしたら自助グループに行ったことと何か関係があるのかもしれないとさすがに思わざるを得ず一週間後に再び自助グループを訪れた。その際に今不思議とギャンブルが一週間止まっていること、自分の借金がいくらあるかなど話して帰った。自助グループというところに行けば、ギャンブルのやめ方を教えてくれたり、借金の返し方やギャンブルとの上手な付き合い方を教えてくれるんだと思っていたのにそういったことは一切なくて、ただその場にいる同じ依存症者の話を聞くだけ。こんなことで何故ギャンブルがやめられるのか！と思う一方で、事実たった一週間ではあるけれど自力では絶対に成しえなかった【一週間ギャンブルをやらないうち】という事に成功していた。自助グループでは、初めて参加した日から起算して一か月、二か月、三か月・・・とやめ続けている日数を重ねると仲間が祝ってくれる。周囲の仲間から、まず一か月を目指してみようと励まされて文字通り毎日指折り日数を数えていた。それまで、一日中ギャンブル三昧であったから急に時間を持て余すようになってどうしていいかわからなくなった。仕事をするのが嫌いであった自分が仕事に打ち込むようになり、借金の返済は待つてはく

れないので「もし、もしもこのままギャンブルをやめられたらいつか借金がなくなる日が来るだろうか」と毎日妄想して過ごしていた。この時期は、交際相手に「今日もギャンブルをやらなかったよ」と毎日報告して過ごしていた。今考えれば有難い相手である。そうこうしているうちに、ギャンブルをやらずに一か月が過ぎた。自助グループでもお祝いしてもらって、なんだか恥ずかしいような嬉しいような感覚だった。しかしながら、PC や携帯でネットを開くたびに今までの閲覧履歴からかギャンブルに関する広告やオススメの動画などが表示されたり、電車の中吊り広告で競艇の広告を見たりするとギャンブルをしていた時の良い経験ばかりが蘇ってきてこの頃の数か月は本当に精神的にきつかった。競艇仲間からの誘いを断るのにも非常に難儀した。やめたからと断っても誘ってくるのがギャンブル仲間の特徴であるから何度も誘いに負けそうになった。競艇場まで連れていかれたこともあったが、今やってしまったら恥ずかしくて自助グループへも行けなくなる！と妙な負けん気を出して何とか踏みとどまることが出来た。

日中仕事をして、夕方に一度片付けて自助グループに行き、21 時過ぎからまた仕事を再開して 24 時過ぎに帰宅する。そんな毎日を過ごしていたがギャンブルで出ていく分のお金が残るわけだから必然的に返済出来る額が大幅に増えてこれまで利息分程度しか払っていなかった借金を毎月数十万円返済するようになった。五百万円以上借り入れがあったので、死ぬまで返し続けるのかと思っていたのに自助グループに参加し始めてから返済を始めていき無理と決めつけていた借金返済がなんと完済出来てしまったのだ。それまでの自分であれば大きく稼いでもギャンブルで使ってしまいその為、返済に充てるという事が出来なかったのにこの事は自分でも本当に驚いた。ギャンブルをやめ始めてから一年の記念で自助グループの仲間が祝ってくれたが、この時思いがけず男泣きをしてしまい自分にもそんな一面があったのかと恥ずかしくも、少し誇らしい気持ちもある。今、ギャンブルをやめ続けて二年と少々が過ぎ、家族や友人・知人に対し自分がしてきた行いについて埋め合わせていくことが容易ではないということを感じて日々を送っている。借りていたお金を返したんだからもういいだろうということは無く、兄弟の間柄であっても若干の心の距離を感じる事がある。迷惑を被った側はいつまでもそれを覚えているから、打ち消すことは出来ないしそれを上書きして余りあるほどの人間になっただけでも勿論無いのだから、生きづらさを覚えて当然なのだと思う。けれど、自分に出来る事は少しずつ言葉ではなく行動で示していく。言うのは簡単で実際は大変な事だけど、それが出来る自分であり、そんな今日一日を繰り返していく自分でいたい。自分は今でもギャンブルは大好きであり、キッカケさえあればコロっとギャンブルをやり始めてそしてギャンブルの地獄の世界に一瞬で戻ってしまうだろうとわかっているからこそ、今二年ではあるがギャンブルの無い暮らしをもらって日々を過ごす中で、今後もギャンブルの無い生活を選んでいきたいと思っている。ついつい、自分の力で今の生き方を勝ち得ていると思ってしまうがただ、これには自助グループの仲間・親兄弟・友人知人と多くの人の助けが働いているだということを出した

めにも、自分のギャンブル依存症からの回復の為に自助グループに通っている。ギャンブル依存症になり、典型的な破滅に近いところまで陥り、自助グループに助けを求めて・・・と悪い事だらけに見えるけれどそれによって自分でもわかっていなかった自分の欠点やどういう性格なのかというところが少し把握出来たところは本当に良かったと思っている。改善していく事は死ぬまで一生の課題だが、自分と向き合うことをやめずに今日一日を過ごして生きていきたいと思っている。